『国際武器移転史』第6号（2018年7月），73－91頁

論 説

オーストラリアにおけるナショナリズム研究と世界大戦の記憶
―「ブリティッシュ・ワールド」論の視点から―

津田　博司*

Historiography on Australian Nationalism and the Commemoration of the World Wars in the Context of the 'British World'

By HIROSHI TSUDA

Anzac Day, which began as a memorial to the First World War's Gallipoli campaign, is a symbolic occasion in Australia during which the nation state commemorates its losses all wars since. This essay examines the transformation of Australian nationalism from the interwar period through to the 1970s by tracing the national integration through war memory in the context of the 'British world': Australians' perceptions of the imperial wars in which they participated and of their own national history have been defined by their country's identity as a former British dominion. The nationalist historiography that arose following the Second World War encouraged a trend to emphasise a dichotomy between Australian nationalism and British imperialism. In this conceptualisation, the experiences of the two World Wars are the moment at which Australia's identity separated from that of the Empire. The analysis on Anzac Day, however, suggests that the imperial identity generated within the 'community of culture' prevailed even after the Second World War. The decline of traditional British solidarity coincided with Australia's gradual decolonisation and the subsequent self-examination that occurred during the 'new nationalism' of the 1960s–70s. The emergence of a nationalist historical discourse and the reinterpretation of war narratives reflected this reformation of national identity, which was not as self-evident as supposed in nationalist historiography.

1　はじめに

オーストラリアでは、第1次世界大戦の100周年にあたって、数多くの記念事業が行われている。イギリス帝国の一員として大戦を戦ったオーストラリアは、当時の総人口約500万人のうち、従軍対象となる年代の男性の38.7%にあたる約42万人を志願兵として動員し、約6万人の戦死者を出すに至った[1)]。21世紀の現在においてもなお、大戦に対する高い社会的関心が維持されている現状からは、オーストラリアが払った犠牲の大きさがうか

＊　筑波大学人文社会系・助教（Assistant Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba）

1）　Scott［1941］p. 874.

がえる。とりわけ1915年のガリポリ上陸作戦に由来するアンザック・デイ（Anzac Day、4月25日）は、オーストラリアにとって最も重要な記念日として、第1次世界大戦以降の戦争における戦没者追悼の場となっている。オスマン帝国領内のダーダネルス海峡の攻略を目指したガリポリ上陸作戦は、イギリス帝国を中心とする連合国軍に多大な被害を出しながら（オーストラリア兵士の戦死者は約8,000人）、目的を果たすことなく撤退に終わったものの、この作戦で初めて実戦に投入されたアンザック軍団（Australian and New Zealand Army Corps、略称ANZAC）の勇敢な戦いぶりから、オーストラリアにとっての世界大戦の記憶の中核をなす経験となった。公式の従軍記者としてガリポリ上陸作戦から西部戦線まで同行し、大戦間期に編纂された公式戦史の総責任者を務めたチャールズ・ビーンは、「現実的な意味で、オーストラリアの国民意識が生まれたのは1915年4月25日であった」という表現を用いて、第1次世界大戦を国民国家としての誕生と結びつける歴史観を普及させることになった[2)]。アンザック・デイは大戦間期にその伝統を確立し、戦没者に捧げる礼拝と生還した兵士を称えるパレードを中心とする式典が、現在まで引き継がれている。

遠い異国での敗戦の記憶がナショナル・アイデンティティの象徴として顕彰され、アンザック神話と呼ばれる言説がその後の戦争経験を包摂しつつ、国民統合に機能し続けている事実に対して、歴史家の解釈は分かれている。ケン・イングリスは、第1次世界大戦以降に大量に建設された戦争記念碑の分析を通して、世俗的な「市民宗教」としてのアンザック神話の役割を指摘している。イングリスによれば、戦争の記憶は既存の宗教の代替として、共同体を結びつける役割を果たしており、アンザック神話は帝国主義や多文化主義といった各時代の統合原理に応じて文脈を読み替えられながら、ナショナリズムの核として存続した[3)]。イングリスの議論を裏づける近年の傾向として、第1次・第2次世界大戦の記憶を有する世代が減少する一方で、戦争を直接経験していない人々の間でアンザック・デイに代表される伝統への関心が高まっており、その流れと軌を一にして、帝国主義時代に周縁化されてきた先住民などのマイノリティによる戦争貢献に関する言説が増加している現状がある。バックパッカーによる戦跡訪問などを分析したブルース・スケーツは、若年層や非イギリス系マイノリティがアンザック神話との関わりを通じて、国民としての帰属意識を見出す過程を明らかにしているが、それぞれジェンダー史と先住民史の代表的研究者であるマリリン・レイクとヘンリー・レイノルズは、こうした大戦間期から受け継がれてきた伝統への回帰を、「オーストラリア史の軍国主義化」として批判する著作を発

2） Bean［1941］p. 910.
3） Inglis［2008］pp. 433-445.

表している[4)]。

オーストラリアにおけるナショナリズムの性質をめぐっては、帝国主義戦争の経験をどのように評価するかが論点となっている。独自の外交権を有さず、イギリス本国による意志決定に追従することになったオーストラリアは、激しい愛国心によって参戦に応じた。初期の戦時内閣を率いた首相アンドリュー・フィッシャーは、「最悪の事態が起こったならば、オーストラリア人は母国（mother country）を守るため、その最後の1人、最後の1シリングまで、母国の側に立って戦うだろう」という言葉を残している[5)]。ここでの「母国」はオーストラリアではなく、イギリス本国を指すものとして一般的に用いられていた表現であり、それ自体が自国と帝国を不可分とするアイデンティティを象徴するものである。

しかし、植民地時代と思考の枠組みを異にする歴史家にとって、こうした自意識は相対化の対象となる。従軍した兵士の手記を渉猟したビル・ガメージは、当初は帝国主義戦争に熱狂した若者たちが、悲惨な戦争経験によって幻滅する様子を描き出している。オーストラリアがイギリスという「他者」のために戦争を強いられたとする大戦像は、ガメージが監修した映画『ガリポリ』（1981年制作）を通じて、単なる学術研究を超えた影響力を得た。ガメージが「壊れた日々」と形容する大戦の経験は、「きわめてナショナリスティックな感情への関心を呼び起こし」、独自のナショナリズムの覚醒は「不可避的にオーストラリア人の帝国への執着を弱めた」とされる[6)]。本稿の課題はこうした評価と史実との整合性を検証することにあるが、議論の出発点として注目すべきなのは、ガメージの歴史観がメディアを介して流通する1970年代までには、かつてオーストラリア人を支えていた帝国的な帰属意識がもはや共有しえない過去として位置づけられ、歴史叙述における「脱植民地化」と形容できるような、自国のナショナリズムと帝国主義を差異化しようとする動向が確認できる点である。

フィッシャーのようなイギリスからの移民とその子孫、すなわち広義の「イギリス人」が人口の大半を占めていた第1次世界大戦当時において、帝国規模の総力戦をオーストラリアがともに戦うことは自明の選択であった。そこには、現在の国民国家を基準とすれば、複数の国家を横断するようなアイデンティティの存在が見てとれる。しかし同時に、多大な犠牲を払ったオーストラリアは、戦争貢献の対価として主権の拡大を要求することになり、植民地としてのナショナリズムは新たな段階を迎えた。第1次世界大戦期のオーストラリアとイギリス本国との関係を論じたエリック・アンドリュースは、パリ講和会議での

4） Scates［2006］; Lake and Reynolds［2010］.
5） *Argus*, 3 August 1914.
6） Gammage［1974］p. 277.

代表権や太平洋地域の旧ドイツ領の処遇などで生じた両国の齟齬を強調し、第2次世界大戦を経て帝国的な紐帯は消滅したとしている[7]。ガメージとも共通するナショナリズムと帝国主義という対立軸は、イギリス帝国のコモンウェルスへの再編やその後の脱植民地化の流れを明解に説明する反面で、歴史家自身が生きた時代における国民国家の境界を過去に投影し、広義の「イギリス人」から狭義の「オーストラリア人」への変容を所与のものとして図式化する危険性をはらんでいる。

オーストラリアにおける「ナショナリズム」はその本質として、帝国的あるいは脱帝国的な二面性を内包するものであった。後述するように、近年のイギリス帝国史研究において「ブリティッシュ・ワールド」として形容される、かつてイギリス帝国およびコモンウェルスを構成した諸国家においては、君主制や「自由」の概念を重視する民主主義といったイギリス的共通文化が長期にわたる影響を及ぼしており、その盛衰が研究上の関心を集めている。「ブリティッシュ・ワールド」論という視点を採用した結果、帝国主義時代の重要性を過度に強調することは避けなければならないが、第1次世界大戦当時のオーストラリア人と現在の国民国家を前提とする歴史家にとっての「ナショナリズム」の内実の違いを明らかにするためには、あえて広義の「イギリス史」である帝国主義時代までさかのぼった上で、その後の脱植民地化に伴うアイデンティティの変容を追跡する必要があるだろう。

本稿は、オーストラリア史研究における脱イギリス帝国的な歴史観の来歴とそこから生じる研究上の問題点を確認した上で、戦争の記憶の次元においてオーストラリアのナショナリズムがたどった変遷を検証する。換言すれば、イギリス帝国およびコモンウェルスへの帰属意識に支えられたアイデンティティが最終的に機能不全に陥り、戦争の記憶が単一の国民国家の境界のなかで語られるようになったこと自体は疑いないとして、それはいつ、どのような過程を経た結果なのかという問いについて、大戦間期から1970年代にかけてのアンザック・デイを中心に考察したい。

2　オーストラリアにおける自国史の構築とイギリス帝国

イギリスの植民地であったオーストラリアにおいては、19世紀末の「グレーター・ブリテン」論に端を発するイギリス帝国史的な枠組み、すなわち本国と海外植民地を含めた広義の「イギリス」のなかに自国を位置づける歴史叙述が、長らく支配的であった。第1次世界大戦中の1916年に出版された『オーストラリア小史』において、メルボルン大学教授のアーネスト・スコットは、ガリポリ上陸作戦に代表されるオーストラリアの戦争貢献

7）　Andrews［1993］pp. 222-225.

を称えた上で、オーストラリア人にとってイギリス史が「自らの」歴史であり、オーストラリアの国土は、イギリスを起源とする人種の優秀性を発揮するための場であると述べている[8)]。第1次世界大戦の公式戦史の編纂にも関わることになるスコットの著作は、オーストラリア史に関する教科書の先駆として広く受け入れられ、1939年に彼が死去した後も改訂を加えられながら、1950年まで版を重ねた。

このスコットを師とするアデレード大学教授のキース・ハンコックは、1930年の著作によって、オーストラリア史についての社会的認知をさらに高めたことで知られる。ハンコックは、植民地時代から続いてきたオーストラリア人の自意識の特徴を、20世紀初頭の首相アルフレッド・ディーキンが残した「自立したオーストラリアのイギリス人（independent Australian Britons）」という言葉に求め、オーストラリアにおけるナショナリズムが白豪主義的な人種意識を介して、帝国主義的な愛国心と結びついていると論じている[9)]。スコットはイギリスからの移民でありながら、オーストラリアにおける歴史学の礎を築いた人物であり、ハンコックはオーストラリア生まれでありながら、研究生活の多くをイギリスで送っているという歴史家自身の出自からも、当時における「イギリス人」と「オーストラリア人」、あるいは「イギリス史」と「オーストラリア史」の境界の曖昧さがうかがえるだろう。

こうした帝国史的な伝統に対して、第2次世界大戦後から現在にかけて、よりオーストラリアそのものに特化した「自国史」を希求する動向も続いてきた。1962年から1987年に発表した叢書を通じてオーストラリア史研究の第一人者となったマニング・クラークは、1945年にメルボルン大学で当時異例であったオーストラリア史の講座を担当することになった経験を、次のように述懐している。「第2次世界大戦は、我々が何者であるかという問いに対して、多くのオーストラリア人の意識を変えた…オーストラリア人は、よりオーストラリアを中心に置くようになりつつあった。我々の歴史はイギリス植民地史の一部ではない…我々はイングランドやアイルランド、スコットランド、ヨーロッパの歴史地図は知っていたが、オーストラリアの歴史地図はほとんど空白であった」[10)]。クラークの脱帝国史的な問題意識は、「ブリティッシュネス」と形容されるイギリスとの共通性ではなく、オーストラリアの独自性を強調するナショナリスト史観の流れを生むことになる。

その典型例であるラッセル・ウォードの『オーストラリアの伝説』は、文学作品などのフォークロア的な伝承を論拠として、元流刑囚を起源とする階級的均質性やブッシュの開

8） Scott［1916］p. 336.
9） Hancock［1930］pp. 66-68.
10）Clark［1990］p. 159.

拓で培われた同志的連帯感にオーストラリア人の「個性」を求め、その個性は第1次・第2次世界大戦を戦った兵士にまで受け継がれていると結論づけた[11)]。ウォードや前述のガメージは、オーストラリア国立大学でクラークの指導を受けた経歴があり、帝国への帰属意識と自国のナショナリズムを対比的にとらえる大戦像は、イギリス帝国史からの脱却と自国史の構築を志向する長期的な潮流の反映としてとらえられる。メルボルン大学でアーネスト・スコットの名を冠した教授職を継承したスチュアート・マッキンタイアは、1990年代末の時点でのオーストラリア史研究の整理として、スコットのような初期の歴史家が所与のものとしていた帝国的次元への関心が失われ、むしろイギリス帝国への言及が忌避されるような傾向があると指摘している[12)]。

オーストラリアにおいて国民国家を単位とする歴史叙述が台頭する一方で、近年のイギリス帝国史研究の分野においては、いわゆる一国史観に対する批判が高まっている。その嚆矢となったのは、ジェントルマン資本主義論の提唱者であるアントニー・ホプキンズによる問題提起であった。ホプキンズは、旧ドミニオン諸国におけるナショナル・アイデンティティの高まりの結果として、それぞれの国家の国内史とかつて隆盛を極めた帝国史の知見が乖離してしまった弊害を批判し、二つの研究領域を改めて接合する必要性を説いた[13)]。こうした議論の延長として、2000年代以降のイギリス帝国史研究では、現在のグローバル化の先行事例としてイギリス帝国全体をとらえなおす「グローバル」な方向性、本国および海外植民地における国境を越えた関係性に着目する「トランスナショナル」な方向性など、複数の国家を横断する歴史叙述が主流となっている[14)]。とりわけ後者の方向性においては、過去の帝国主義的な歴史観を相対化しつつも、イギリス的な政治制度や共通文化を介して結びついていた広大な領域を「ブリティッシュ・ワールド」として再解釈することによって、各地域における経験の多様性を描きなおす試みが進んでいる。こうした研究史の文脈において、オーストラリアはまさに「ブリティッシュ・ワールド」論の中核となりうる位置を占める反面で、脱一国史的な帝国史への回帰とナショナリスト史観との衝突が避けられない。オーストラリア国立大学でマニング・クラークの名を冠した教授職を継承したアン・カーソイズが分析したように、オーストラリアの歴史家は先住民や

11）Ward［1958］pp. 213-218.

12）MacIntyre［1999］pp. 163-164.

13）Hopkins［1999］pp. 215-216.

14）前者の方向性の例としては、ジョン・ダーウィンによる一連の著作Darwin［2009］; Darwin［2012］が挙げられる。後者の方向性については、論者によって解釈が多様であり、必ずしもその内実に統一性があるわけではないものの、2002年以降に各国の研究者によって開催されてきた国際会議の成果として、Bridge and Fedorowich［2003］; Buckner and Francis［2005］; Darian-Smith et al.［2007］がある。

多文化主義といった独自の研究対象を開拓し、自国を中心に置いた「オーストラリア史」を確立するという課題を達成するや否や、研究上の転回を遂げた外国の「イギリス史」研究者との対話を迫られるジレンマを抱えることになったのである[15)]。

アンザック神話の文脈で言えば、帝国主義戦争を戦った当時のオーストラリア人の認識と脱植民地化後の国民国家を前提とした歴史叙述との間には、大きな落差が存在する。さらに世界大戦という主題の性格上、戦没者追悼のような社会文化史的な次元と安全保障政策のような政治外交史的な次元での評価を、整合的に集約する手法が求められる。オーストラリア外交史の専門家であるネヴィル・メイニーは、イギリス帝国への依存が自国の成熟を妨げたというナショナリスト史観の前提（「抑圧された（thwarted）ナショナリズム」）に反論した上で、オーストラリアにとっての帝国が有した「文化の共同体」と「利害の共同体」という二つの性格に注目している[16)]。すなわち、広義の「イギリス人」としての自意識を支えた背景として、人種意識や歴史といった種々の共通文化の共有と、政治・経済・軍事を横断する権益の共有という、二つの次元の要素が指摘できる。第1次・第2次世界大戦期には、白豪主義に代表されるイギリス本国との文化的連帯感が継続する一方で、太平洋地域の防衛をめぐる国益の不一致が表面化する状況が生じており、位相を異にする複数の「共同体」の方向性を峻別しながら、全体としての帰結を示すことが課題となる。

本稿での議論が示すように、オーストラリアが独自のナショナル・アイデンティティを獲得した過程は単線的ではなく、国民国家と帝国の二項対立的な図式ではとらえられない。メイニーの議論を引き継いだスチュアート・ウォードやジェームズ・カランによる脱植民地化についての分析によれば、イギリス側がヨーロッパ回帰へ向かう1960年代までのオーストラリアの政策決定者や世論においては、長らく続いてきた帝国的な自己規定が支配的であって、帝国の終焉はむしろ深刻なアイデンティティの危機を伴ったとされている[17)]。以下では、こうした先行研究による知見をふまえた上で、大戦間期から1970年代にかけてのアンザック・デイを概観し、オーストラリアにおけるナショナリズムの構造転換を跡づける。

3　アンザック・デイに表れるナショナル・アイデンティティ

（1）第1次・第2次世界大戦と「文化の共同体」

アンザック・デイにおける戦没者追悼の主要な担い手となったのは、1916年に結成さ

15）Curthoys［2003］pp. 70-89.
16）Meaney［2001］.
17）Ward［2001］, Curran and Ward［2010］.

れたオーストラリア海陸帰還兵士帝国連盟（Returned Sailors’ and Soldiers’ Imperial League of Australia、以下RSL）であった[18]。オーストラリアでは大戦中から在郷軍人会の一元化が進み、帰還兵士は各地での戦争記念碑の建設やパレードなどを主導して、現在に至るまで大きな発言権を有してきた。アンザック兵士の優れた身体能力と同志愛をオーストラリア人の理想像として称賛したビーンは、第1次（さらには第2次）世界大戦の帰還兵士を指して、「ほぼ純粋なイギリスの血統、すなわちイングランド人、アイルランド人、スコットランド人、ウェールズ人で成り立っており、ブリテン諸島のようにお互いが分離しているのではなく、混ざり合っている」と述べている[19]。ここでは、当時の白豪主義を支えた人種意識とともに、その人種が（例えば「イングランド」ではなく）「イギリス」を単位として語られている。前述の「ブリティッシュ・ワールド」論を援用するならば、オーストラリアにおけるナショナリズムの言説の基盤は、ブリテン諸島内の地域性が捨象された「ブリティッシュネス」の概念にあったことがうかがえる。こうした人種意識は戦争の記憶と結びつきながら、オーストラリアおよびイギリス帝国についての認識を形成することになる。

例えば、大戦中の戦争貢献に謝意を示すことを目的として、1920年にイギリス王太子エドワード（のちのエドワード8世）がオーストラリアを訪れた際、フィッシャーの後継として戦時内閣を率いた首相ビリー・ヒューズは、次のような歓迎の演説を残している[20]。「今回の戦争が起こったとき、オーストラリアはまだ産着を着た状態でした。今日のオーストラリアは、その偉大さを意識した国民国家です。その国民はオーストラリア人であることを誇りとし、イギリス帝国に属することを誇りとしています…我々はあなたを、我が人種および帝国の親善大使として歓迎します」。大戦を経た国民国家としての成熟は、人種意識や王族への忠誠心を媒介として、旧来の帝国への帰属意識と矛盾なく共存している。ヒューズによれば、イギリス帝国は「諸国家がそれぞれの問題をそれぞれの方法で管理する、自由国家の集合」であって、「地球の最果てまで広がりながら、我々全員が狭いブリテン諸島の住人であるかのように」結びついていた。ヒューズは自国の権益をめぐって、パリ講和会議でしばしばイギリス首相デヴィッド・ロイド＝ジョージと対立したこと

18）空軍の設立にともなって、1940年にオーストラリア海陸空帰還兵士帝国連盟（Returned Sailors’, Soldiers’ and Airmen’s Imperial League of Australia）へ改称。1965年にオーストラリア帰還兵士連盟（Returned Services League of Australia）へ改称されるまで、「帝国」を冠した象徴的な団体名が維持された。団体の略称としては、簡略化されたRSLを用いることが結成当初からの慣例であったことから、本稿でもそれに倣って表記する。

19）Bean［1940］p. 3.

20）*Sydney Morning Herald*, 28 May 1920.

で知られるが、オーストラリアがそうした主張を行いうる前提には、イギリス本国との対等かつ親密な関係が想定されていたのである。

大戦間期におけるイギリス帝国のコモンウェルスへの再編は、オーストラリアを始めとするドミニオンへの権限委譲（ナショナリスト史観的に形容すれば、植民地的従属からの脱却）によってもたらされたが、同時代人はこうした変容をどのように受け止めたのだろうか。前年の帝国会議によってドミニオンが理念上、イギリス本国と対等な主権を有するものと定められた1927年には、キャンベラでの連邦議会開設にあたって、ヨーク公アルバート(のちのジョージ6世)がオーストラリアを訪れている。メルボルン滞在中にアンザック・デイの追悼式典に参加したヨーク公は、つめかけた群集に対して次のように呼びかけた。「オーストラリア連邦が成立した当時、イギリス帝国は、支配的なイギリス本国とほぼそれに従属する人々で構成されていました。それ以降イギリス帝国は進化の過程を経て、対等な立場で、それぞれが自治権と主権を有し、王冠への忠誠と共通の市民権で結びつけられた国家による、コモンウェルスが存在するに至りました。私たちは、私たちが自由であるがゆえに結びついています。私たちの自由の意識こそが、私たちを一つにしているのです」[21]。ここでは、過去の従属関係が反省されつつも、イギリス的民主主義に基づく「自由のコモンウェルス」という論理によって、むしろオーストラリアと帝国の調和が強調されている。

ヨーク公の言説が共有された空間そのものが帝国主義的な色彩の強いものであったことも、注目に値する。この日の式典の様子を撮影した写真（図1）からは、左手に白色の記念碑の存在が確認できる。これはロンドンにおける戦争記念日の式典の場であった戦没者記念碑（図2）を模したレプリカで、当時のメルボルンでの式典の際に毎年設置されていたものである。つまり、オーストラリアの人々は、帝国の首都での式典の様式を複製することを通して、戦争の記憶を顕彰していた。ヨーク公とともに式典に参加した第1次世界大戦の英雄ジョン・モナシュ中将によれば、アンザックの経験は「オーストラリアの人々をたちまちに国民として一体化させ、全世界に対して、我々［オーストラリア人］がその祖先[イギリス]に不釣り合いな存在ではないことを証明した」[22]。大戦間期のアンザック・デイにおいては、大戦の経験によってナショナリズムの核とドミニオンとしての主権拡大がもたらされたとされるものの、そこに帝国からの離反に向かうような意識の萌芽は見出せない。イギリス帝国はウェストミンスター憲章に結実する国制上の変革を経験したにもかかわらず（あるいは、ヨーク公の言説にしたがえば、経験した「からこそ」）、「ブリ

21）*Argus*, 27 April 1927.
22）*Sydney Morning Herald*, 26 April 1927.

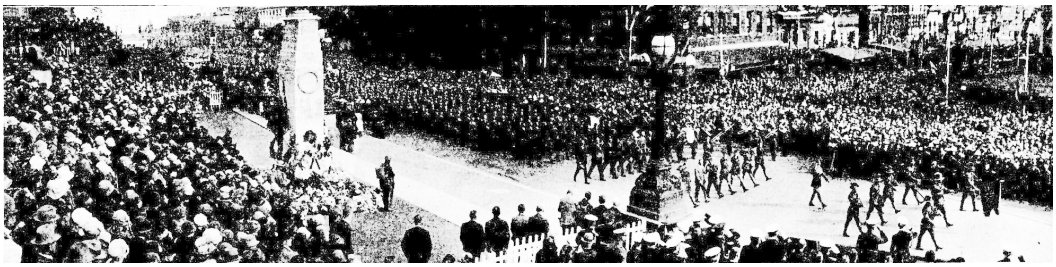

図1（上図）
1927年のメルボルンにおけるアンザック・デイの式典
出典：*Sydney Morning Herald*, 27 April 1927

図2（下図）
1920年のロンドンにおける戦没者記念碑の除幕式
出典：Australian War Memorial H12221

ティッシュ・ワールド」を横断するアイデンティティを維持することに成功した。別の表現をすれば、政治外交史上の画期であるコモンウェルスへの再編は、「文化の共同体」に基づくオーストラリアの帝国的なナショナリズムを根本的に変えるには至らなかったと考えられる。

一方で第2次世界大戦の勃発によって、オーストラリアを取り巻く「利害の共同体」は動揺を迎えた。1942年のシンガポール陥落が示すように、イギリス帝国の枠組みでの太平洋地域の防衛はもはや不可能であり、オーストラリアは戦後のANZUS条約が示すように、アメリカとの同盟へと傾斜することとなった。戦時内閣を率いた首相ジョン・カーティンは1941年のクリスマス演説として、太平洋戦線において「アメリカ合衆国とオーストラリアが最大の発言権をもつべき」であって、「イギリスとの伝統的な結びつきや血縁関係による呵責を離れて、アメリカに目を向ける」方針を表明している[23)]。この演説は、後年のナショナリスト史観において、オーストラリアからイギリスへの決別宣言として受け止められる。ガメージは、先の大戦時には導入に至らなかった徴兵制がカーティン政権下で迅速に導入された点を論拠として、自国への直接的脅威の結果、オーストラリアが独自の「国益」を意識したと評価している[24)]。オーストラリアの安全保障上の対米依存の起源として、第2次世界大戦が重要な転機であることは間違いない。しかし、それをもって

23）*Herald* (Melbourne), 27 December 1941.
24）Gammage［1995］pp. 5-15.

帝国からの脱却と同一視することは、やや早計である。

スチュアート・ウォードは、カーティンの演説がRSLや野党から反発を招き、カーティンが「オーストラリアはイギリス帝国と一体をなす一部に他ならず、イギリス的生活や制度への献身において、ブリティッシュ・コモンウェルスでオーストラリア以上に根強いところは存在しない」と釈明したことを指摘している[25)]。カーティンが依然としてイギリスとの紐帯を重視していた証左としては、1943年に連邦総督の後継としてイギリス王族のグロスター公ヘンリーを指名したことも挙げられる。カーティンが党首を務める労働党は従来、総督職をオーストラリア出身者に限定すべきだと主張してきたが、カーティンは王冠の一体性を象徴する王族を総督に迎えることで、太平洋地域におけるイギリスとの協力体制の維持を目指した[26)]。アメリカとの同盟がオーストラリアにとって重要であり、前述のクラークによる歴史叙述にしたがえば、「よりオーストラリアを中心に置く」外交上の動向があったこと自体は疑いないものの、イギリス帝国への帰属意識も並存していた点に留意すべきだろう。

アンザック・デイにおける言説に立ち戻れば、ナショナリスト史観に基づく歴史叙述と史実との乖離は明らかである。カーティンのクリスマス演説に先立つ1941年には、第2次世界大戦に従軍した兵士によるパレードへの参加を指して、『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙が次のように報道した。「老年のアンザック兵士が亡くなることで、行進の列から毎年2,000人の隙間ができる、そう我々は聞かされてきた。しかし、行進の列はまだ短くなってはいない。新しいアンザック兵士が父親たちの場所を埋めているのだ。昨日、新旧のアンザック兵士が初めてともに行進した」[27)]。アンザックの「息子たち」への言及は、メルボルンの『アーガス』紙の論説記事にも共通している。「アンザック・デイは誇りと悔いが入り混じった日である。すなわちかつての、そして今日のアンザック兵士に対する誇り。そして26年前の犠牲が結局、この苦い犠牲の繰り返ししかもたらさなかったことへの悔い…［二つの世界大戦に共通するのは］ドイツの領土への欲望、もう一つは我々オーストラリアの血統、そしてその祖先であるイギリスの血統の健全さである」[28)]。こうした論調からは、アンザック神話の継承が帝国規模の連帯感の否定ではなく、再確認をもたらしたことが読み取れる。

第2次世界大戦の終戦後初めてのアンザック・デイである1946年には、例年よりも大規

25）Ward［2008］p. 249.
26）Serle［1998］p. 40.
27）*Sydney Morning Herald*, 26 April 1941.
28）*Argus*, 25 April 1941.

模なパレードが行われ、『アーガス』紙の論説記事は、アンザックの経験を次のように意味づけた。「そもそもアンザック精神は、忠実なイギリス的精神であり続けてきた…矮小なオーストラリア主義を拡大することは、オーストラリアの二つの世代にわたる行動が強化した構造を傷つけてしまいかねない…オーストラリアが生き延びて成長し、完全かつ創造的に『オーストラリア的』でありうるのは、ブリティッシュ・コモンウェルスの諸国家の一員だからである」[29]。太平洋地域における独自の国益を重視する「オーストラリア主義」への言及は、第2次世界大戦による「利害の共同体」の動揺を反映したものととらえられるが、国民国家と帝国という二項対立的な図式は、「イギリス的精神」を根拠として退けられている。少なくとも第1次・第2次世界大戦期に関する限り、「文化の共同体」と結びついた帝国的アイデンティティは、新たな戦争の記憶を内包しながら存続したのである。

（2）1960・70年代の「新しいナショナリズム」

大戦間期に確立した戦没者追悼の伝統と現在における世界大戦の記念事業の隆盛を考慮したとき、1960年から70年代にかけてのアンザック・デイは停滞期にあった。式典に参加する人々の数は減少傾向にあり、メディアでは戦争の記憶の継承をめぐる懸念が表明されるようになった。こうした現象の背景として当時指摘されたのは、第1次世界大戦からは半世紀、第2次世界大戦からも20年以上が経過したことで、直接戦争を経験した世代がしだいに減少し、とりわけ若年層の関心が薄れつつあるという問題であった。この時代はオーストラリアがベトナム戦争に関与していた時期でもあり、ベトナム反戦運動に共感する若年層を取り込むためには、これまで認識されてこなかったアンザックの伝統と軍国主義との関わりを払拭する必要があった。

こうした状況のなかで、例えば1965年のガリポリ上陸作戦50周年にあたっては、『シドニー・モーニング・ヘラルド』紙上で特集記事が掲載された。そこでは、アンザック・デイがそう遠くない将来に「何の意味もない歴史上の日付」になってしまう可能性を排除することなく、大学生やガリポリ上陸作戦に参加した退役軍人といった複数の世代による討論が行われている（図3）。討論における焦点の一つはアンザックの伝統をめぐる世代間の落差であり、同年のアンザック・デイの論説記事もまた、「多くの若者はアンザック・デイを年長者と同じようには見ていない」ため、戦没者追悼の名を借りた「戦争の賛美や、その言葉の最悪の意味において『浮かれ騒ぐ』場」として受け止められていると嘆いている[30]。このような言説は以前には決して見られなかったものであり、ベトナム戦争をめぐ

29）*Argus*, 25 April 1946.
30）*Sydney Morning Herald*, 25 April 1965.

Fifty Years After Gallipoli, a Panel Debates...

Can Anzac Day Survive?

THE PANEL

図３ 「アンザック・デイは生き残ることができるか?」と題した紙上討論会

出典：*Sydney Morning Herald*, 17 April 1965

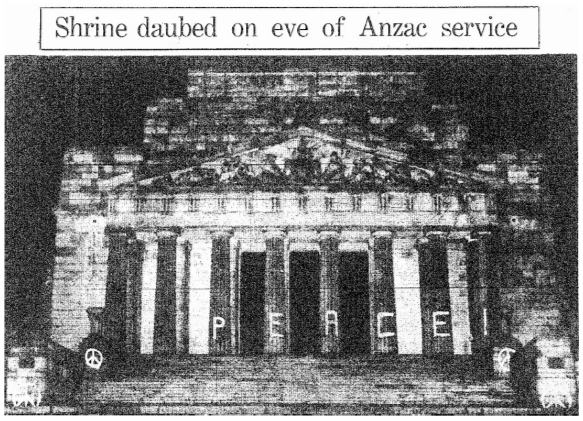

図４ 反戦・反核運動のシンボルが落書きされたメルボルンの戦争記念碑

出典：*Age*, 23 April 1971

る論争が激化した1970年代に至っては、戦争記念碑を意図的に損壊する事件が発生するなど、きわめて劇的な変容が起こっていた（図4）。

さらに年代の経過した現在もなお、アンザック・デイへの関心が高まっている事例を考慮すれば、こうした現象がもたらされた理由を世界大戦との時代の隔たりだけに帰することは適当でない。そこには、例えばベトナム戦争のような、1960・70年代に特有の要因が想定される。イギリス帝国史の文脈から考察すれば、この年代はイギリス本国のヨーロッパ経済共同体への加盟申請やスエズ以東からの撤退、すなわちヨーロッパへの回帰と海外植民地の放棄が決定づけられた時期である。第2次世界大戦期には軋轢を生じつつも機能しえた「利害の共同体」は、オーストラリアというよりもイギリスの選択によって強

制的に消滅することとなり、結果として帝国への帰属意識の共有に基づく「文化の共同体」もまた、深刻な動揺に陥ることとなった。

脱帝国的なナショナリスト史観の図式にしたがえば、帝国からの解放によって独自のナショナリズムが開花する道が開いたはずだが、同時代人の懸念はむしろ確固たるアイデンティティの不在にあったようである。社会評論の分野で活躍した歴史家ジェフリー・サールは、オーストラリアおよび帝国への「古い二重の忠誠」に依存した「強固な国民的伝統の不在」の結果、「かつて標準だった帝国的な愛国主義のレトリックが衰退して以降、現在も続く真空状態」によってナショナリズムの基盤が揺らいでいると指摘した[31)]。オーストラリアは「ブリティッシュ・ワールド」の中核を担ってきた代償として、旧来の「ブリティッシュネス」とは異なる論理による「新しいナショナリズム」の模索を強いられた[32)]。この時期のアンザック・デイは、植民地時代の過去の遺物として廃れるか、脱植民地化を遂げた国民国家の象徴として再生するかの岐路にあったのである。

こうしたナショナリズムの構造転換をふまえて報道を追跡すると、アンザックの伝統に対する批判の先鋭化とそれに対応する応酬が見てとれる。1969年の『エイジ』紙の投書欄では、ある投書が「50年以上前に起こった軍事上の敗北を公に賛美するために、毎年一日を費やす必要はもはやない」として、「過去の戦争の恐怖に思いをはせる」よりも「現在の紛争を終わらせるための建設的な努力」を訴えたことをきっかけに、数人の帰還兵士が返答を寄せている。ある返答は投書主の「浅はかな思考」を否定し、より投書主に共感的な返答は「常識を備えた人間なら、誰も戦争を美化しない」と諭して、アンザック・デイが国民的記念日である理由を民主主義の防衛にあると説得した[33)]。同年の『オーストラリアン』紙の論説記事は、あるべき戦争の記憶に関する議論が起きていること自体はむしろ健全であるという認識に立って、「我々が何を祝っているのかについて最終的な合意には至っていないとしても、アンザック・デイそのもののありようの変化は、我々が合意に近づいていることを示している。未だアイデンティティを模索する国家にとって、それは至るべき重要な合意である」と述べている[34)]。こうしたメディアの論調からは、アイデンティティをめぐる世代間の対話の場として、アンザック・デイを再生させようとする意図

31）Serle［1967］pp. 238-239, 244.

32）「新しいナショナリズム」という用語は、政治評論家ドナルド・ホーンの命名によるもので（Horne［1968］を参照）、白豪主義や帝国主義といった「古いナショナリズム」が成り立たなくなったという前提に立って、今後目指されるべき国民統合の理念を指した。オーストラリアに固有の国民意識を志向するという点を除けば、その内容について共通理解があったわけではないものの、当時の流行語としてしばしば用いられた。

33）*Age*, 23 and 25 April 1969.

34）*Australian*, 25 April 1969.

がうかがえる。

脱植民地化を志向する「新しいナショナリズム」は「未来形」で語られる言語であって、オーストラリアにとって固有の統合原理が必要であることは確かだとしても、それを達成する方法については不透明であった。つまり、帝国的アイデンティティの機能不全が明らかになる一方で、ナショナリスト史観が想定するような安定的な国民統合の枠組みは容易に成立せず、模索のただ中にあった。アンザック・デイにおいては、戦争の記憶の文脈を読み替えることによって、帝国との差異化を図る方向性が強まっていった。1970年の『エイジ』紙の論説記事は、アンザック・デイが顕彰しているのは「戦争で亡くなった我が国の人々の人間的な資質、すなわち勇気、自己犠牲、同志愛の資質」だと主張し、次のように結論づけている。「我々は、自らと彼らを同一視する。なぜなら、彼らは我々の親類や友人であり、我々自身のような人々だったのだから。我々は、彼らがもっていた男らしさと同じ資質が、我々のなかにもあると思いたいのだ」[35)]。ここではその成功の当否はともかくとして、アンザック神話が曖昧な「我々」の物語として再構成されている。1970年以降のアンザック・デイにおいて主題となるのは、あくまで一人称で語られる「オーストラリア人」であって、かつてのような「イギリス人」としての連帯感を見出す傾向は後退していった。

アンザック神話の帝国的な文脈の喪失は、後年の多文化主義に適合的な言説を生み出すことになる。一例として、1975年のガリポリ上陸作戦60周年に向けてRSLが実施した懸賞論文の募集では、次のような将来像が寄稿されている。「オーストラリアが新たな、多人種の社会に発展すれば、我々の記念日としてアンザック・デイの追悼活動を続けることは、ますます難しくなる。アンザック・デイが国民的記念日として祝われるべきだという考えを、大量の外国生まれの人々が当然のものとして受けいれるとは期待できない…［その反面］祖国のための犠牲により力点が置かれるようになるかもしれない。こうした概念であれば、肌の色、人種、信仰に関わりなく、あらゆる人間に把握できるため、すべての人々を一つの存在、一つの偉大な国民へと統合できるだろう」[36)]。ここには、イングリスが示すことになる「市民宗教」への転換の予兆が垣間見える。1970年代以降のアンザック・デイからは、かつて「ブリティッシュ・ワールド」の文脈で語られていた要素が取り除かれ、民主主義や愛国心といった普遍的価値の側面が強調されることで、オーストラリ

35）*Age*, 25 April 1970.

36）“The future of Anzac Day as Australia’s national day, 1975”, Records of the Returned Services League of Australia 1916-1985, National Library of Australia, MS 6609, Box 1105 (Miscellaneous files, Addition 22 September 1998).

ア固有のナショナリズムとの合致が目指された。

改めてオーストラリア史研究におけるナショナリズムの評価に立ち戻ると、ガメージの脱帝国的な大戦像が世に問われた時期が、まさに「新しいナショナリズム」による模索の過程と軌を一にしている点に注目すべきである。本稿で検証してきたように、大戦間期のオーストラリアにおける戦争の記憶とナショナル・アイデンティティの分析としてとらえるならば、ナショナリスト史観に基づく歴史叙述には偏りがあると言わざるを得ない。ガメージが史料として用いた手記の多くは当時一般には公開されておらず、帝国主義戦争を取り巻く負の記憶は周縁化されていた。しかし、1970年代という発表年代の文脈までふまえて再解釈するならば、国民国家としての成熟とイギリス帝国への帰属意識を二項対立的にとらえる思考の枠組みは、「新しいナショナリズム」の台頭がもたらした構造転換を如実に示すものであって、史実との整合性というよりはむしろ、脱植民地化後の歴史学に表出したアイデンティティ、あるいは歴史家とメディアの共同による自国史の読み替えの例として、参照すべき重要性を有していると位置づけられるのではないだろうか。

4　おわりに

映画『ガリポリ』の監督ピーター・ウィアーは、ビーンが編纂した戦史やガメージの著作を参照しながら、志願兵としてガリポリ攻略作戦に参加した2人の陸上選手の人物像を設定した。愛国的な主人公アーチーと戦争に対して懐疑的なフランクの間では、次のような会話が交わされる。

アーチー「とくに君みたいな人間は志願しなくちゃ。」
フランク「どうして俺みたいな人間が？」
アーチー「君は陸上選手だろ？」
フランク「（笑いながら）それと何の関係があるんだよ？」
アーチー「100メートル走るのに12秒もかかるような仲間でさえ志願しようとしてるのに、君は行かないのか？」
フランク「（いらついた様子で）俺たちの戦争じゃないからさ！」
アーチー「俺たちの戦争じゃないって、一体どういうことだ？」
フランク「イギリスの戦争だろ。俺たちには関係ないよ。」
アーチー「（フランクの言葉に驚いて立ち止まり）君は自分がどういう人間か知って

るか？とんでもない臆病者だ！」[37)]

結局フランクはアーチーに誘われるまま入隊するが、アーチーがイギリス軍の無謀な作戦によって戦死する場面とともに、映画は幕を下ろす。「俺たちの戦争」と「イギリスの戦争」を対置し、無垢なオーストラリアの犠牲を強調する大戦像は、ビーンによる歴史叙述を大きく逸脱しているものの、「新しいナショナリズム」をめぐる模索を経た1980年代のオーストラリアの観客にとって、史実を反映した「ブリティッシュ・ワールド」を前提とするアイデンティティが共感を得られなかったであろうことは、想像に難くない。

脱植民地化を契機とする戦争の記憶の読み替えは、多文化主義という新たな統合原理の確立とともに加速した。1993年に行われたキャンベラでの無名兵士の埋葬の際には、首相ポール・キーティングが次のような弔辞を残している。「私たちはこのオーストラリア人の名を知りませんし、今後も知ることはないでしょう。私たちは彼の階級や部隊を知りません。私たちは、彼がどこで生まれたのか、いつ、どのように死んだのかさえ、正確には知りません」。無名戦士をあらゆる出自や特徴を喪失した存在として表象しつつ、キーティングはこう結論づけた。「しかし、彼は私たちが誇りとしてきた人々の一員です。私たちは、彼が西部戦線で命を落とした45,000人のオーストラリア人の1人であることを知っています…彼はその人々のすべてであると同時に、私たちの1人なのです」[38)]。こうした匿名性を帯びた戦没者像は、非イギリス系を含む多様な国民の包摂を可能にした。先住民兵士に関する研究で知られるロバート・ホールは、こう述べている。「多くの先住民の人々が白人の戦友とともに従軍し、命を落とした。無名兵士は、彼らの1人かも知れない。無名兵士は戦争記念館の中心、記憶の霊廟に移葬されたことで、すべてのオーストラリア人をアンザック神話によって一つにまとめる。無名兵士の匿名性そのものが、彼が眠る場所を白人と先住民の双方にとって、現代の聖地にしている」[39)]。帝国主義戦争の記憶は次々と文脈を読み替えられ、大戦間期のオーストラリアからかけ離れた多文化社会のマイノリティを射程に収めるまでに至った。

あらゆる文化的背景の国民が共通の戦争体験を媒介にアンザック神話へと動員されていくことへの賛否はともかく、アンザック・デイは現時点において強固な基盤を獲得している。この現状を間接的に支えているのは、ホールのような歴史家によるマイノリティの

37）Gammage and Williamson［1981］p. 107.

38）Paul Keating, Funeral Service of the Unknown Australian Soldier, 11 November 1993, Department of the Prime Minister and Cabinet, PM Transcripts. < http://pmtranscripts.dpmc.gov.au/release/transcript-9035>

39）Hall［1995］pp. v-vi.

戦争貢献の再発見である。もちろん、マイノリティに注目した学術研究は多文化主義による国民統合そのものを目的としているわけではない。しかし、戦争の記憶ひいては自国史を構築するにあたって歴史家の介在が重要であったことは、ビーンやガメージの事例からも見てとれる。オーストラリアにおけるナショナリズム研究は、帝国主義や「新しいナショナリズム」といった思想の影響を受けながら、結果として各時代の社会的要請に対応した歴史像を生産してきた。本稿が依拠する「ブリティッシュ・ワールド」論もまた、おそらくその例外ではない。仮にイギリス帝国史研究が「ブリティッシュネス」の長期的な影響力を見出すことに終始するならば、オーストラリア史研究におけるナショナリスト史観と同様の構造的な陥穽を逃れられない。本稿が跡づけてきたナショナリズムと世界大戦の記憶の変遷は、オーストラリアのように重層的なアイデンティティを有してきた国家の歴史を論じるにあたって、歴史家が自らの研究視角そのものを相対化することが不可欠であると示しているように思われる。

文献リスト

Andrews, Eric Montgomery［1993］*The Anzac Illusion: Anglo-Australian Relations during World War I*, Cambridge.

Bean, Charles Edwin Woodrow［1940］*The Old A.I.F. and the New*, Sydney.

Bean, Charles Edwin Woodrow［1941］*The Story of ANZAC*, *The Official History of Australia in the War of 1914-1918*, vol. 2, Sydney.

Bridge, Carl and Fedorowich, Kent, eds.［2003］*The British World: Diaspora, Culture and Identity*, London.

Buckner, Philip and Francis, Robert Douglas, eds.［2005］*Rediscovering the British World*, Calgary.

Clark, Manning［1990］*The Quest for Grace*, Ringwood.

Curran, James and Ward, Stuart［2010］*The Unknown Nation: Australia after Empire*, Carlton.

Curthoys, Ann［2003］“We've Just Started Making National Histories, and You Want Us to Stop Already?” in Antoinette Burton, ed., *After the Imperial Turn: Thinking with and through the Nation*, Durham.

Darian-Smith, Kate et al., eds.［2007］*Britishness Abroad: Transnational Movements and Imperial Cultures*, Carlton.

Darwin, John［2009］*The Empire Project: The Rise and Fall of the British World-System, 1830-1970*, Cambridge.

Darwin, John［2012］*Unfinished Empire: The Global Expansion of Britain*, London.

Gammage, Bill［1974］*The Broken Years: Australian Soldiers in the Great War*, Canberra.

Gammage, Bill［1995］“Was the Great War Australia’s war? ” in Craig Wilcox, ed., *The Great War, Gains and Losses: Anzac and Empire*, Canberra.

Gammage, Bill and Williamson, David［1981］*The Story of Gallipoli: The Film about the Men Who Made a Legend*, Ringwood.

Hall, Robert Anthony［1995］*Fighters from the Fringe: Aborigines and Torres Strait Islanders Recall the Second World War*, Canberra.

Hancock, William Keith［1930］*Australia*, London.

Horne, Donald［1968］“The New Nationalism? ”, *Bulletin*, 5 October.

Hopkins, Antony Gerald［1999］“Back to the Future: From National History to Imperial History”, *Past & Present*, 169.

Inglis, Kenneth Stanley［2008］*Sacred Places: War Memorials in the Australian Landscape*, Carlton, 2008.

Lake, Marilyn and Reynolds, Henry, eds.［2010］*What's Wrong with Anzac?: The Militarisation of Australian History, Sydney*.

MacIntyre, Stuart［1999］“Australia and the Empire” in R. W. Winks, ed., *Historiography*, *The Oxford History of the British Empire*, vol. 5, Oxford.

Meaney, Neville［2001］“Britishness and Australian Identity: The Problem of Nationalism in Australian History and Historiography”, *Australian Historical Studies*, 116.

Scates, Bruce［2006］*Return to Gallipoli: Walking the Battlefields of the Great War*, Cambridge.

Scott, Ernest［1916］*A Short History of Australia*, London.

Scott, Ernest［1941］*Australia during the War*, *The Official History of Australia in the War of 1914–1918,* vol. 11, Sydney.

Serle, Geoffrey［1967］“Austerica Unlimited? ”, *Meanjin Quarterly*, September 1967.

Serle, Geoffrey［1998］*For Australia and Labor: Prime Minister John Curtin*, Perth, 1998.

Ward, Russell［1958］*The Australian Legend*, Melbourne.

Ward, Stuart［2001］*Australia and the British Embrace: The Demise of the Imperial Ideal*, Carlton South.

Ward, Stuart［2008］“Security: Defending Australia's Empire” in D. M. Schreuder and Stuart Ward, eds., *Australia's Empire*, Oxford.